

グルマーイ・チッドヴィラーサーナンダについての熟考

大いなる意識に触れる

ジャイヤ・サイバート

それは 1992 年のことでした。グルプールニマーの日、シュリー・ムクターナンダ・アーシュラムのシャクティ・マンダップで、グルマーイとのサツァングがありました。既にシッダ・ヨーガの教えに従っていた私の両親も参加しており、サツァングの締めくくりのグルマーイのダルシヤンを受けるために、生後5週間の息子である私を連れて来ていました。

2021 年 5 月初めのある朝に話は飛びます。私はシュリー・ムクターナンダ・アーシュラムのアヌグラハにある建物の一つの中を歩いていました。それは私のセーヴァーの務めの一つが、シュリー・ムクターナンダ・アーシュラムの建物と敷地の全部の適切な維持を確実にすることだからです。角を曲がると、グルマーイが廊下を私の方に向かって歩いて来るのが見えました。私は立ち止まり、グルマーイが通ることができるように待ちました。グルマーイは私を見ると、顔がパッと明るくなり、言いました。「ちょうど今、あなたに会いたいと思っていました」

それからグルマーイは、庭の一つにある2本のカエデの木に手入れが必要で恐らく剪定(せんてい)が必要かもしれないと思う、と私に言いました。アーシュラムにあるこれらの観賞用のカエデは、剪定しないと形が悪くなり、育ち過ぎて枝が重くなって折れるとグルマーイは説明しました。グルデーヴ・シッダ・ピートゥにあるたくさんのマンゴーの木は、定期的に剪定されていて、そうしないと実を結ばないのだとグルマーイは言いました。グルマーイは、その2本のカエデの木をその朝のうちに見に行って調べるように、私に頼みました。私は庭に行って木を見るのが待ちきれませんでした。

翌朝、私がアヌグラハの前庭で植物を調べていると、グルマーイが建物の近くの小道を歩いているのが見えました。とりわけ、グルマーイが私に調べるように言った 2 本の木を見たと言えたくて、私はグルマーイについて歩き始めました。グルマーイは、いずれかの木に剪定の必要があるかと私に尋ねました。私は、分かりません、もっと調べますと答えました。するとグルマーイは、庭に行った時のことを説明し、何が起こったかをより詳しく述べるように私に言いました。私は 5 分くらい庭を訪れ、遠くから木々を見たと話しました。私は、資料を調べ、その木々の標準的な剪定時期を確かめるつもりだと言いました。

グルマーイは言いました。「ジャイヤ、私があなたに木々がどうしているか、何をすべきかを査定するためによく観察するように頼んだのに、あなたはそれらの木々を遠くから見たのですか。あなたが木々に顔を見せなかったなら、木々はどうしてあなたが調べに来たことが分かるのですか。木々はあなたが面倒を見に来たことを知る必要があります。それがどうしてか分かりますか。木々は大いなる意識を持っています。すべての生命のあるものもないものも、大いなる意識を持っているのです」

「その木々を遠くから見たのなら、あなたはそれらが当然受けるべき尊敬を払わなかったのです。あなたはその木々を見ませんでしたし、木々があなたを見ることも許しませんでした。木々は生きています！ 木々に耳を傾け、一緒にいて、樹皮や葉に触れる必要があります。そうすることによって初めて、それらが何を必要としているかが分かります。木を感じることで、真にそれとつながることにより、それに話し掛けて耳を傾けることによって、木が病気の時や何かを必要としている時が分かるのです」

「これがすべての中に大いなる意識を認める自然な方法です。自分の周囲、自分が世話をしている木々や自然に波長を合わせることによって、自然にすべきことが感じられます。そして——自然があなたに話し掛けます」

グルマーイが話し始めた最初の瞬間から、私には彼女が私に教えていることに対する深い気づきがありました。グルマーイが私にこの自然界についての理解を、特にグルマーイ自身が自然と交流する仕方の中で、既にどのように多くのさまざまな方法で教えていたのかが分かりました。私はひたすらグルマーイに耳を傾けながら、これらの教えは私が学んで応用するのに最も重要であり、そうすることによってのみ、アーシュラムの敷地に生えている木々が元気に育つことを確実にするという私の責任を果たすことができることが分かりました。グルマーイからこれらの教えを受け取った後、それらが、私がささげるセーヴァーについて新しい見方や取り組み方を私に教えていることに気づきました——私は、アーシュラムのすべての木々や自然一般と新しい関係を築く必要があることが分かっていました。

数日後私は、庭園を担当するもう一人のスタッフと、アムリットの中庭のライラックの 1 本を剪定するために働いていました。これはその時美しく花を咲かせており、その数週間前から中庭を芳香で満たしていました。そのライラックが開花すると、誰もがその香を味わいたくて中庭を歩きたいと思うのです。

どのようにライラックとつながり、その茂みからのコミュニケーションをどうやって受け取るかについてグルマーイから教わったことをやってみる最初の日と考えて、私は剪定作業にやってきました。私たちが剪定を始めると、私はライラックの茂みの中に立ち、その枝を感じ、静かにどれを残すべきか、どれを剪定すべきかを感じようとしていました。そうしていると、私は内側から霊妙な合図を受け取り、それは私にどの枝を残し、どの枝を切るかを示しました。このようにその茂みが何を必要としているかが分かった後、剪定のエキスパートであるもう一人のセーヴァイトに、私はある枝を指しては言いました。「あの枝を切ったらどうだろうか」

5 割以上もの確率で、彼は目を輝かせて、いいよと言いました。私が取り除いた方がよいと思った枝は、彼の植物の剪定の基準に合っていたのです。彼がいいよと言った時、木々からのコミュニケーションを受け取りたいという私の願いが承認されたことになりました。それは、私の

すべきことは、ただ静かにしていて、植物のささやき声にしっかり耳を傾け、よく注意することだと示していました——そうすれば、それらは、手助けをするために私が知るべきことを教えてくれるのです。私は低木や木々とこのような会話をするのがいかに気楽で、効果があるかに気づきました。

私はグルマリーから教わったこの新しい世界の見方と自然との関わり方にワクワクし、そのことを同僚と分かち合いたいと思いました。そして、私がそうすると、スタッフの一人が彼女がどのようにして、木々と気持ちを通わせ、木々の話を聞くことを学んだかについて、話してくれました。彼女は、グルマリーが何十年もこの取り組み方を自分の生徒に教えていると言いました。以下は、彼女が語った話です。

2005 年に私がグルクラの生徒としてグルデーヴ・シッダ・ピートゥでセーヴァーをささげていた時、フランスから来ていた非常に見識のある生態学者のシッダ・ヨーギによるアーシュラム敷地内のツアーに参加する機会がありました。このシッダ・ヨーギは、定期的にグルデーヴ・シッダ・ピートゥを訪れ、アーシュラムの敷地にある見事な木々の手入れをするセーヴァーをささげていました。この訪問では、彼女はグルクラの生徒の中でダクシン・カシの木々を巡るツアーに興味のある人たちを案内していました。（ダクシン・カシは、屋外の自然の中で、シッダ・ヨーガの教えを呼び起こし、シッダ・ヨーガの修行の支えとするために、1980 年代後半にグルマリーが造ったグルデーヴ・シッダ・ピートゥにある汚れない神聖な場所です）

その生態学者は、普遍の大いなる意識がすべてに浸透しているというシッダ・ヨーガの核となる教えについて話すことからツアーを始めました。庭園部門でセーヴァーをささげている自分や他の人たちが、長年にわたってグルマリーからアーシュラムの木々の話に耳を傾ける方法を学んだと話しました——私たちに教えようとしていたのは、まさにそのことだったのです！ 彼女の指示に従い、私たちはそれぞれ1本の木の所に行き、触ったり、

そばに立ったり、沈黙を守ったりして、耳を傾けました。次に彼女は、聞くのでした。「木は、元気にしていますか」。私たちは、聞いたことや感じたことを分かち合いました。それは、不思議な体験でした——私たちは皆、この木は喜んでいたり、この木は気分が良くないというのが、分かっているのです。次に彼女は、私たちが聞いたり、感じたりしたことに整合している科学的、植物学的な説明をしました。このような方法でグルマリーの英知を受け取ることは、驚くべきことでした。

2021 年5月にグルマリーから受け取った教えの実践を続けながら、より多くのアーシュラムの木々や、植物を知るようになりました。そして、それらのささやき声に耳を傾けることの微妙さも学んでいます。例えば、アーシュラムのある一角に、大きなレンギョウの垣根が、長い年月を経て伸び過ぎた状態にありました。その茂みは今では丈が3メートルにもなり、剪定する必要がありました。

剪定する前に、私はレンギョウの所に行って話をしました。枝に触ったり、長年アーシュラムに美を添えてくれたことにお礼を言ったり、剪定することを伝えたりしながら、垣根に沿って歩きました。心の中で、私はレンギョウからの感謝を感じました。それはまるで、私が称賛していることや時間を共有するために来たことを、レンギョウがとても嬉しいと思っているかのようでした。私の注目をしっかり浴びていることを大いに喜んでいることが感じられました。後になって、このことはすべての命あるものと同じだと気づきました。レンギョウは、注目され、尊重され、大切に扱われることを喜んでいたのでした。

レンギョウと話をしている間、マントラ、オーム・ナマー・シヴァーヤが常に私の意識の最前線にありました——これらのレンギョウと一緒にいる時に、マントラを復唱しないということなどできないという感じでした。レンギョウが将来も長年にわたって奉仕し、繁茂できるように、ほとんどの枝は剪定する必要があると伝えました。新芽を出すことにエネルギーを集中できるように、3フィート(約 90 センチ)まで切り詰めるつもりだということを伝えました。とても丁重に、レンギョウは

3フィートはちょっと短過ぎると答えました——4～5フィートの方がいいだろう、その方が体が受ける打撃が少ないだろうから。このようにして、私は剪定を進めることになりました。

私はこれらの木々の中に存在する大いなる意識と、このように、コミュニケーションを取り、やりとりをし、つながりを持つことは、グルマリーからシャクティパートを受け取った時に目覚めた真の内なる知識を利用する一つの方法であると理解するようになりました。私はシッダ・ヨーガの道を歩むことにより、すべてのものの本質である、遍在する一つの大いなる意識が存在することを学びました。言葉やジェスチャーでコミュニケーションを図ることができるという通常の意味での「声」を持っていないものも、「声」を本当は持っています——すべてのものの基礎となり、すべてを構成する大いなる意識を通して。私がこの大いなる意識とつながる時、いかなるものにもそれが当然受けるべき敬意を表する時、何かを見てその何かが自分自身を見ることを許す時、注意を向けて必要なことを何かに尋ねる時、それが私と私の世界の間のコミュニケーションの経路が自由に流れる時です。そして、どのような時でも、誰が何を必要としているか、また自分が何をすべきかについての内なる知識を、私は信頼することができるのです。

